

大学生の認知症に対するスティグマと思考抑制傾向および 仮想的有能感の関連

Relationship between stigma against dementia, tendency to use thought suppression and assumed competence among university students.

渡邊 慧
Satoshi Watanabe

森本 浩志
Hiroshi Morimoto

本研究では、認知症に関する知識および認知症の人と関わった経験と認知症に対するスティグマとの関連に対する、思考抑制傾向と仮想的有能感の緩衝効果を検討した。大学生222名を対象にウェブ調査を行った。その結果、認知症に対するスティグマと有意な関連がみられたのは、認知症の人と過去に関わった経験のみであり、思考抑制傾向と仮想的有能感の緩衝効果はみられなかった。これらの結果から、認知症に対するスティグマの低減においては、認知症の人と過去に関わった経験の重要性が示唆された。大学生の認知症に対するスティグマの低減に寄与する要因ついて、さらなる検討が必要である。

キーワード：認知症、スティグマ、思考抑制傾向、仮想的有能感、認知症の人との関わり経験

問題と目的

高齢化に伴って認知症の人が増加しており、2025年には65歳以上の高齢者の認知症有病率が19%に達すると推計されている（富塚・門間・尾崎, 2018）。認知症は認知機能が低下するため、症状の進行に伴って生活全般の介護が必要になるが、十分なサポートがあれば地域で生活続けることが可能である。一方で、認知症に対するスティグマは日本を含めて世界的に広くみられることが指摘されている（Egdell, Cook, Stavert, Ritchie, Tolson, & Danson, 2019；内田・李・茨木・加瀬, 2020）。たとえば、内閣府が行った調査（内閣府, 2020）では、5割近くの人が「認知症になると、身の回りのことができなくなり、介護施設に入ってサポートを利用することが必要になる」、あるいは「認知症になると、暴言、暴力など周りの人に迷惑をかけてしまうので、今まで暮らしてきた地域で生活することが難しくなる」などのイメー

ジを認知症に対して有していることが明らかになっている。また、大学生を対象として認知症に対するイメージを調査した金・黒田（2011）は、調査対象者の半数近くが認知症の人との関わりを求めておらず、認知症に対して否定的なイメージ、すなわちスティグマを有していることを指摘している。Swaffer（2014）は認知症に対するスティグマは認知症の人とその家族の主観的幸福感や生活の質（QOL）に影響することを指摘している。このため、世間一般の認知症に対するイメージを向上することが必要であると考えられる。

これまで高齢者に対するイメージについては数多く検討されているものの、その多くが一般的な高齢者像に対するものであり、日本では認知症を対象とした研究は少ない（奥村・久世, 2008）。これまでの認知症を対象とした研究では、認知症に関する知識の多さや認知症の人と関わった経験があることは、認知症に対するスティグマと関連

があることが指摘されている（金・黒田, 2011；奥村・久世, 2008, 2009；杉山・川西・中尾, 2014）。一方で、久世・奥村（2008）は、大学生においては、認知症に関する知識と認知症に対するスティグマの間に有意な関連がみられないことを指摘している。このように、認知症の人との関わり経験は認知症に対するスティグマと負の関連があることが一貫して指摘されているものの、認知症に関する知識については知見が一貫していない。認知症の人の増加を踏まえると、認知症に対するスティグマを低減することは、認知症に対する誤解に起因するトラブルを減らし、認知症の人とその介護者のQOLの向上につながると考えられる（Swaffer, 2014）。

そこで本研究では、認知症に関する知識や認知症の人との関わり経験と認知症に対するスティグマとの関連に影響を与える要因について、思考抑制傾向と仮想的有能感を検討する。

思考抑制傾向

久世・奥村（2008）の指摘を踏まえると、大学生は認知症に関する知識と関連しない認知症に対するスティグマを有していることが考えられる。社会集団に対するスティグマを持つことは、その集団の情報を迅速に処理できる点で有益であるが、不正確な情報処理や対人関係の悪化などの不利益をもたらす（大江・岡・横井, 2006）。現在、特定の社会集団に対して、スティグマに基づいた言動をすることは不適切であるとされるが、特定の社会集団の構成員をスティグマに当てはめないように抑制しようすると、逆にスティグマが活性化することが指摘されている（田戸岡・村田, 2010）。このような現象は思考抑制の逆説的效果と呼ばれる（Wegner, Schneider, Carter, & White, 1987）。

一方で、田戸岡・村田（2010）は、ある対象のネガティブな特性を抑制するとき、対象に対する他の次元のポジティブな特性を代替思考として考えることで、思考抑制の逆説的效果が低減することを指摘している。したがって、認知症に対するスティグマに思考抑制が関わっている場合、ス

ティグマに関する思考を抑制するのではなく、適切な代替思考を考えることで、認知症に対するスティグマを低減できる可能性がある。しかし、田戸岡・村田（2010）は一般的な高齢者像に対するスティグマを対象としており、認知症に対するスティグマについては検討されていない。

そこで、本研究では認知症に関する知識および認知症の人との関わり経験と認知症に対するスティグマとの関連に対して、思考抑制が緩衝効果を有するかを検討するために、以下の仮説を検証する。なお、大学生の多くは、日常生活の中で認知症について考えることは少ないことが考えられる。このため、認知症に関する否定的な考えが浮かんた際に、その思考を抑制するかどうかを研究対象者に聞くことは困難であると考えられる。そこで本研究では、習慣的に思考抑制を行う傾向を表す思考抑制傾向（服部, 2018）を用いることにする。

仮説 1 思考抑制傾向が低い者では認知症に関する知識と認知症に対するスティグマとの間に負の関連が見られるが、思考抑制傾向が高い者では両者に正の関連が見られる。

仮説 2 思考抑制傾向が低い者では認知症の人との関わり経験と認知症に対するスティグマとの間に負の関連が見られるが、思考抑制傾向が高い者では両者に正の関連が見られる。

仮想的有能感

速水（2006）は、自分の実績とは関係なく他者を低く評価することで得ようとする有能感を仮想的有能感と定義した。仮想的有能感是他者を軽視することで得られる「偽りの有能感」ともいうことができ、社会的に望ましくないことから仮想的有能感を有することは本人に意識されにくいとされる（速水, 2006）。

他者軽視傾向の強い仮想的有能感の高い人の特徴として、実生活におけるネガティブな個人的出来事に対して怒りを感じやすいことがあげられる（速水 2006）。このように、仮想的有能感は日常生活で経験するネガティブな感情と関わりが深いことが指摘されている（速水, 2012）。たとえば、

小平・小塩・速水（2007）は、日常生活における対人関係の出来事において、仮想的有能感は抑うつ感情および敵意感情と弱い正の相関があることを示した。また、速水（2012）は仮想的有能感が高い人ほど、人間関係におけるネガティブな経験を多くしていることを指摘している。このように仮想的有能感は日常における対人関係の問題と関わりがある。

認知症の介護では、家族による虐待に代表される認知症の人との対人関係の問題が起きることや（矢吹・吉川・阿部・加藤，2016）、家族以外の他者との対人関係が家族介護者の精神的負担やネガティブな経験につながる場合があることが示唆されている（黒澤，2011）。このように対人関係は介護において重要な要因であり、家族介護者と認知症の人との間の不適応に仮想的有能感が介在する可能性も考えられる。

さらに仮想的有能感は、他者を低く評価するという点においてスティグマと類似している。仮想的有能感が高い者は内集団の成員には優位な価値付けを行い、外集団の成員には劣位な価値付けを行うことで、外集団の成員の排除を正当化するスティグマを持ちやすいことが指摘されている（沼田・井上・朱，2011）。日常的に認知症の人と接する機会が少なくと考えられる大学生においては、認知症の人を外集団と見なしやすいと考えられる。このため、たとえ認知症に関する知識があったとしても、仮想的有能感が高い場合は、認知症に対するスティグマは低減しないことが考えられる。

そこで、認知症に関する知識および認知症の人との関わり経験と認知症に対するスティグマとの関連に対して、仮想的有能感が緩衝効果を有するかを検討するために、以下の仮説を検証する。

仮説3 仮想的有能感が低い者では認知症に関する知識と認知症に対するスティグマとの間に負の関連が見られるが、仮想的有能感が高い者では両者に正の関連が見られる。

仮説4 仮想的有能感が低い者では認知症の人との関わり経験と認知症に対するスティグマとの間に負の関連が見られるが、仮想的有能感が高い者では両者に正の関連が見られる。

方法

調査協力者

関東圏にある大学に通う学生を対象に、Google フォームを用いてウェブ調査を行った。回答が得られた222名（男性70名、女性152名、平均年齢 19.29 ± 1.42 歳）のうち、回答に不備のある者はいなかったため、全員のデータを分析対象とした。Google フォームのURLおよびQRコードを記載した調査協力依頼状を大学の講義終了後の機会などを利用して配布し、口頭と書面にて研究協力依頼を行った。謝礼としてお菓子を配布した。また、著者が所属する大学の研究参加者募集システムを用いて、研究協力依頼を行った。質問紙の回答にかかる時間はおよそ10分であった。調査期間は2019年7月中旬～2019年10月初旬であった。

倫理的配慮として、回答は無記名で統計的に処理するため、個人が特定されることはないこと、集計した回答は論文の執筆および発表のためにのみ使用すること、調査への協力は強制ではなく協力しない場合や途中で回答を止めた場合に不利益は一切ないことを調査協力依頼状に記載し、口頭で説明した。

測度

デモグラフィック項目 年齢・学年・性別の記入を求めた。

認知症に関する知識 認知症に関する知識尺度（金・黒田，2011）を使用した。認知症に関する一般的知識に加えて、不安や妄想などの行動・心理症状（周辺症状）やその対処に関する知識などを問う15項目で構成される。項目例としては、「脳の老化によるものなので、歳をとると誰もがなる」、「認知症は、昔の記憶より、最近の記憶のほうが比較的保たれている」があげられる。「そう思う」「そう思わない」「わからない」の3件法で回答を求めた（ $\alpha=.85$ ）。各項目で正答の場合は1点、それ以外の場合は0点とした。最高得点は15点であり、高得点ほど認知症に関する正確な知識を有していることを表す。

認知症の人との関わり経験 認知症の人と関わった経験について、「なし」「過去にあった」「現

在関わっている」の3件法で回答を求めた。「過去にあった」と「現在関わっている」に回答した場合には、関わりの頻度について「年に一回」「半年に一回」「月に一回」「週に一回以上」の4件法で回答を求めた。また、認知症の人との具体的な関わり方について自由記述で回答を求めた。

認知症に対するスティグマ 認知症に関する態度尺度（金・黒田，2011）を使用した。15項目から構成される。項目例としては、「認知症の人と周りの人と仲良くする能力がある」、「普段の生活でもっと認知症の人と関わる機会があってもよい」があげられる。「1：全く思わない」「2：あまり思わない」「3：ややそう思う」「4：そう思う」の4件法で回答を求めた（ $\alpha=.76$ ）。高得点ほど、認知症の人に対して肯定的態度を有すること（スティグマが少ないこと）を表す。

思考抑制傾向 White Bear Suppression Inventory (Wegner & Zanakos, 1994) の日本語版（松本，2008）を使用した。15項目から構成される。「1：全く当てはまらない」「2：あまり当てはまらない」「3：どちらともいえない」「4：やや当てはまる」「5：非常に当てはまる」の5件法で回答を求めた（ $\alpha=.88$ ）。高得点ほど思考抑制傾向が高いことを表す。

仮想的有能感 仮想的有能感尺度（速水，2006）を使用した。本尺度は他者軽視傾向を測定する尺度であり，11項目で構成される。このうち「今の日本を動かしている人の多くは，たいした人間ではない」、「世の中には，努力しなくても偉くなる人が少なくない」の2項目は大学生にとってなじみがなく，除いて扱うことが望ましいとされるため（速水，2012），本研究ではこの2項目を除いた9項目を使用した。「1：全く思わない」「2：あまり思わない」「3：どちらともいえない」「4：ときどき思う」「5：よく思う」の5件法で回答を求めた（ $\alpha=.86$ ）。高得点ほど仮想的有能感が高いことを表す。

結果

測定変数の基本統計量および相関係数を算出した（Table 1）。認知症に関する知識と思考抑制

傾向，仮想的有能感のいずれも認知症に対するスティグマとの間に有意な相関がみられなかった。認知症の人との関わり経験を独立変数，認知症に対するスティグマを従属変数とした1要因分散分析を行った結果，主効果が有意であったが（ $F(2,219)=4.33, p<.05$ ），Holm法による多重比較の結果，なし（ $M=2.78\pm 0.03$ ），過去にあった（ $M=2.95\pm 0.06$ ），現在関わっている（ $M=2.92\pm 0.09$ ）の各水準間で有意差はみられなかった。また，認知症の人との関わり頻度を独立変数，認知症に対するスティグマを従属変数とした1要因分散分析を行った結果，主効果は有意ではなかった（年に一回： $M=2.90\pm 0.07$ ，半年に一回： $M=2.84\pm 0.07$ ，月に一回： $M=3.18\pm 0.12$ ，週に一回以上： $M=3.07\pm 0.09$ ； $F(3,73)=2.72, ns.$ ）。認知症の人との具体的な関わりについての自由記述には，68名から回答が得られた。KJ法を用いて回答を分類した結果，50名は祖父母・曾祖父母などの親族，11名がボランティアやアルバイト先での一時的な関わり，7名はその他であった。

仮説1について，認知症に関する知識と思考抑制傾向，およびこれらの交互作用項を説明変数，認知症に対するスティグマを目的変数とした階層的重回帰分析を行った（Table 2）。その結果，思考抑制傾向の主効果（ $\beta=-.05, ns.$ ）および交互作用項（ $\beta=-.01, ns.$ ）は有意ではなかった。以上より，仮説1は支持されなかった。

仮説2について，まず思考抑制傾向の得点の平均値に基づいて，分析対象者を2群に分けた（高群98名，低群124名）。そして，認知症の人との関わり経験3水準（なし，過去にあった，現在関わっている） \times 思考抑制傾向2水準（高群・低群）を独立変数，認知症に対するスティグマを従属変数とした2要因分散分析を行った（Table 3）。その結果，思考抑制傾向の主効果（ $F(1, 210)=2.18, ns.$ ）および交互作用（ $F(2, 210)=0.69, ns.$ ）のいずれも有意ではなかった。以上より，仮説2は支持されなかった。

仮説3について，認知症に関する知識と仮想的有能感，およびこれらの交互作用項を説明変数，認知症に対するスティグマを目的変数とした階層

Table 1 各指標の基本統計量と相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	1.	2.	3.
1. 認知症に関する知識	9.29	4.05	—		
2. 思考抑制傾向	3.38	0.76	.10	—	
3. 仮想的有能感	2.41	0.80	.00	.11	—
4. 認知症に対するスティグマ	2.84	0.39	.11	.10	-.11

Table 2 認知症に対するスティグマを目的変数とした階層的重回帰分析

	<i>R</i> ²	β	<i>t</i>
Step 1	.03		
認知症に関する知識		.01	1.56
思考抑制傾向		.05	1.43
仮想的有能感		-.06	1.75
Step 2	.05		
認知症に関する知識×思考抑制傾向		-.01	0.81
認知症に関する知識×仮想的有能感		.01	1.65

Table 3 認知症に対するスティグマを従属変数とした2要因分散分析

		a. 思考抑制傾向		b. 仮想的有能感		<i>F</i>				
c. 認知症の人との 関わり経験		高群	低群	高群	低群	a	b	c	a×c	b×c
なし	<i>n</i>	67	78	66	79					
	<i>M</i>	2.83	2.73	2.75	2.82					
	<i>SD</i>	0.04	0.05	0.05	0.04					
過去にあった	<i>n</i>	22	32	32	22					
	<i>M</i>	2.95	2.95	2.91	2.99					
	<i>SD</i>	0.07	0.08	0.07	0.08	2.18	2.02	3.86*	0.69	0.12
現在ある	<i>n</i>	9	14	8	15					
	<i>M</i>	3.04	2.80	2.83	3.00					
	<i>SD</i>	0.11	0.16	0.16	0.10					

注) **p*<.05.

的重回帰分析を行った (Table 2)。その結果、仮想的有能感の主効果 ($\beta = -.06, ns.$) および交互作用項 ($\beta = .01, ns.$) は有意ではなかった。以上から、仮説3は支持されなかった。

仮説4について、まず仮想的有能感の得点の平均値に基づいて、分析対象者を2群に分けた (高群106名、低群116名)。そして、認知症の人との関わり経験3水準 (なし、過去にあった、現在関わっている) × 仮想的有能感2水準 (高群・低群)

を独立変数、認知症に対するスティグマを従属変数とした2要因分散分析を行った (Table 3)。その結果、仮想的有能感の主効果 ($F(1, 210) = 2.02, ns.$) および交互作用 ($F(2, 210) = 0.12, ns.$) は有意ではなかった。以上から、仮説4は支持されなかった。一方で、認知症の人との関わり経験の主効果 ($F(2, 210) = 3.86, p < .05$) は有意であった。Holm法による多重比較の結果、認知症の人との関わりが過去にあった者 (2.95 ± 0.06) は、関わ

りがない者 (2.78 ± 0.03) と比べて、認知症に関する態度尺度の得点が高かった (すなわち、認知症に対するスティグマが低かった) ($t(210) = 2.62, p < .05$)。

考察

本研究では、大学生を対象として、認知症に関する知識および認知症の人との関わり経験と認知症に対するスティグマとの関連に対する、思考抑制傾向と仮想的有能感の緩衝効果を検討した。思考抑制傾向については、認知症に関する知識および認知症の人との関わり経験のいずれとも有意な交互作用が示されなかったため、仮説 1 および仮説 2 は支持されなかった。思考抑制傾向の高さは、認知症に関する知識あるいは認知症の人との関わり経験と認知症に対するスティグマとの関連に影響しないことが考えられる。仮想的有能感についても、認知症に関する知識および認知症の人との関わり経験のいずれとも有意な交互作用が示されなかったため、仮説 3 および仮説 4 は支持されなかった。認知症に関する知識あるいは認知症の人との関わり経験と認知症に対するスティグマの関連に影響しないことが考えられる。

認知症に関する知識について、本研究の対象者の認知症に関する知識尺度の得点の平均値 (9.29 ± 4.00) は、大学生を対象とした金・黒田 (2011) の結果 (9.7 ± 3.1) と同程度であった。金・黒田 (2011) は大学生における認知症の症状やその対応方法に関する知識の乏しさを指摘していることを踏まえると、本研究の対象者である大学生も認知症に関する知識が十分にあるとは言えないと考えられる。本研究では、久世・奥村 (2008) と同様に、認知症に関する知識と認知症に対するスティグマとの間に有意な関連がみられなかったが、これらの結果は研究対象者の認知症に関する知識の少なさが影響したことが考えられる。したがって、大学生を対象として認知症の疾患教育を行うことで、認知症に対するスティグマが低減するかどうか検討する必要がある。

認知症の人との関わり経験については、先行研究 (金・黒田, 2011; 奥村・久世, 2009) では認

知症の人との関わり経験を有することは認知症に対するスティグマの低減につながることが示唆されている。一方で、本研究では現在認知症の人と関わっている人は、認知症の人と関わった経験が無い人と認知症に対するスティグマに有意差が見られず、過去に認知症の人と関わった経験がある者の認知症に対するスティグマが他群と比べて低かった。石附・阿部 (2017) は、認知症の人と一緒に暮らした経験がある人よりも、認知症の人と一緒に活動をした人の方が、認知症に対するスティグマが低かったことを指摘している。そして、認知症の人との生活では、肯定的な経験だけでなく、否定的な経験もすることから、認知症の人と関わった量だけでなく、関わりの質についても検討する必要があることを指摘している。認知症の人の介護者は心身の健康が悪化しやすいこと (Chiao, Wu, & Hsiao, 2015) を踏まえると、本研究の分析対象者のうち現在認知症の人と関わっている者は、認知症の人との関わりの中で困難な経験をしていることで、関わる頻度に関わらず、認知症に対するスティグマが低減されていないことが考えられる。一方で、過去に認知症と関わった経験がある者は、以前の認知症の人との関わりを通して認知症の実際を知ることができたことで、認知症に対する否定的なイメージが緩和されたことが考えられる。しかしながら、本研究の対象者には現在認知症の人と関わっている者が非常に少なく、また得られた自由記述においても認知症の人との関わりの内容や質について詳細に検討することができなかった。このため、認知症との人との関係性や、認知症の人と関わった時期および関わった回数、関わりの内容および質 (肯定的な経験であったのか、否定的な経験であったのか、など) などについて、今後検討する必要がある。

本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、まず本研究は横断調査であるため、得られた結果について因果関係は言及できないことがあげられる。また、本研究の対象者は限られているため、大学生全体に一般化できないことがあげられる。次に、本研究では思考抑

制傾向を測定したが、これは日常的に思考抑制を行う傾向を測定するものであり、研究対象者が認知症に関するネガティブな思考が浮かんだ際に思考抑制をするか否かについては分からない。このため、思考抑制については場面想定法などの他の方法を使って、本研究の結果を再検討する必要がある。

引用文献

- Chiao, C. Y., Wu, H. S., & Hsiao, C. Y. (2015). Caregiver burden for informal caregivers of patients with dementia: A systematic review. *International nursing review*, 62, 340-350.
- Egdell, V., Cook, M., Stavert, J., Ritchie, L., Tolson, D., & Danson, M. (2019). Dementia in the workplace: are employers supporting employees living with dementia?. *Aging & Mental Health*. Advance online publication. doi: 10.1080/13607863.2019.1667299
- 服部 陽介 (2018). 思考抑制傾向とストレス経験が考え込みと反省的熟考に与える影響. *パーソナリティ研究*, 3, 244-252.
- 速水 敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち 講談社
- 速水 敏彦 (2012). 仮想的有能感の心理学—他人を見下す若者を検証する— 北大路書房
- 石附 敬・阿部 哲也 (2017). 認知症スティグマの低減に資する要因群の探索: 大学生を対象にした試行調査を基に. *東北福祉大学研究紀要*, 41, 133-143.
- 金 高・黒田 研二 (2011). 認知症に対するスティグマに関連する要因: 認知症に関する態度尺度と知識尺度の作成. *社会医学研究*, 28, 43-55.
- 小平 英志・小塩 真司・速水 敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験. *パーソナリティ研究*, 15, 217-227.
- 黒澤 直子 (2011). 認知症高齢者の家族介護者への支援に関する現状と課題. *人間福祉研究*, 14, 121-128.
- 久世 淳子・奥村 由美子 (2008). 学生の認知症に関する知識. *日本福祉大学情報社会科学論集*, 11, 65-69.
- 松本 麻友子 (2008). 拡張版反応スタイル尺度の作成. *パーソナリティ研究*, 16, 209-219.
- 内閣府 (2020). 認知症に対する世論調査. 内閣府 Retrieved from <https://survey.govonline.go.jp/tokubetu/r01/r01-ninchisho.pdf>. (August 17, 2020)
- 沼田 潤・井上 智義・朱 虹 (2011). ネガティブなイメージを持たれている外国に対する偏見を低減する写真提示の効果. *人間環境学研究*, 9, 53-62.
- 大江 朋子・岡 隆・横井 俊 (2006). スティグマ抑制の動機と方略: その分類と関係. *社会心理学研究*, 22, 33-47.
- 奥村 由美子・久世 淳子 (2008). 高齢者のイメージに関する文献研究—一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージ—. *日本福祉大学情報社会科学論集*, 11, 57-64.
- 奥村 由美子・久世 淳子 (2009). 大学生の高齢者イメージに関連する要因—認知症高齢者と健常高齢者のイメージの比較—. *日本福祉大学健康科学論集*, 12, 31-38.
- 杉山 京・川西 美里・中尾 竜二 (2014). 地域住民における認知症に対するスティグマと認知症の知識量との関連. *老年精神医学雑誌*, 25, 556-565.
- Swaffer, K. (2014). Dementia: stigma, language, and dementia-friendly. *Dementia*, 13, 709-716.
- 田戸岡 好香・村田 光二 (2010). ネガティブなスティグマの抑制におけるリバウンド効果の低減方略: 代替思考の内容に注目して. *社会心理学研究*, 26, 46-56.
- 富塚 美和・門間 晶子・尾崎 伊都子 (2018). 認知症に対する中高年期男女の態度と知識の実態および予防行動実行に関連する要因. *日本看護研究学会雑誌*, 41, 899-910.
- 内田 和宏・李 泰俊・茨木 裕子・加瀬 裕子 (2020). 地域住民の認知症に対するスティグマとその関連要因. *老年社会科学*, 42, 30-38.
- 矢吹 知之・吉川 悠貴・阿部 哲也・加藤 伸司 (2016). 認知症家族介護者における高齢者虐待の蓋然性自覚の生起要因. *老年社会科学*, 37, 383-396.
- Wegner, D. M., Schneider, D. J., Carter, S. R., & White, T. L. (1987). Paradoxical effects of thought suppression. *Journal of personality and social psychology*, 53, 5-13.
- Wegner, D. M., & Zanakos, S. (1994). Chronic thought suppression. *Journal of Personality*, 62, 615-640.

This study examined the moderating effect of the tendency to use thought suppression and assumed competence on the relationship between knowledge about dementia, experience of involvement with people with dementia, and stigma against dementia. A web survey was conducted on 222 university students. Result showed that only past experiences of involvement with people with dementia was negatively associated with stigma against dementia. There was no significant moderating effect of the tendency to use thought suppression and assumed competence. These results suggest that past experiences of involvement with people with dementia is important for reducing stigma against dementia. It is necessary to examine factors reducing stigma against dementia among university students.

Key words: dementia, stigma, tendency to use thought suppression, assumed competence, experience of involvement with people with dementia